



夜明け



大泉 章

夜明け

夜明け

太陽はもうずっと川の向こう側に傾いている。

釣竿や柄のついた網を持って河原をかけまわり、魚や虫を追いかけていた子供たちの姿はそこにはもうない。それは夏が終わってしまったからというわけではなく、また子供たちが家に帰る時刻を過ぎていたからというわけでもなかった。

川幅は百メートルほどだろうか。土手は整然と格子状のコンクリートで固められている。虫一匹入り込む隙間もない完璧な幾何学模様を作り出している。有名な建築家によるデザインだ。

この時季の川の水量は少ない。川底は干上がっていて、いく筋かの小川となって流れているだけだ。その小川のほとりには草が青々とした茂みをつくり自由な営みを誇っている。草は冬には枯れる。そして雪解け水で水かさが増す頃にはすべてが洗い流される。そのおかげでコンクリートで固められる心配はない。

河川敷には金属製のベンチが並んでいる。同じ有名な建築家によるものだ。それらは水平に整えられた地面に整然と配置されている。その一番端のベンチに佐藤はひとり座っていた。

佐藤は特に大柄というわけではないが、小柄というわけでもない。色白の顔に黒縁のメガネをかけ、短めの髪は頭のラインにそって整えられている。黒のスーツに白のシャツ、ネクタイは青を基調としたストライプ柄のものをしている。買ったばかりの黒の革靴はオレンジ色の夕日を捉え、ひざには長方形の鞆がまっすぐに置かれている。時折腕時計に目をやり辺りを見回すが、人影は全くない。夕方の羽虫の音さえもなく、川の流れる音がかすかに響いているだけだ。

そこに背の高い男が現れた。

男は日焼けした肌に澄んだ大きな瞳をしていて、口からは強く真っ白な歯が見えている。胸元が大きく開いた白のポロシャツにカーキのズボンをはいていて、脇には細長い紙袋を抱えている。

川の向こう側に傾いている夕日は、長身の男を正面から照らしているが、投げかけられたさらに長身の影はベンチとは反対の方向に伸びているため、佐藤は後方にいる男には気づかない。男はベンチに座る佐藤のほうへゆっくりと近づいていった。

「佐藤さんですね」後ろから声がした。

佐藤は、慌てて振り向いた。

「イチカワさん？ はい、佐藤です」

長身の男は佐藤の顔をじっと見ながらゆっくりと正面に回りこんできた。

「N J Nのリクルート担当、ジョッシュ・イチカワです。よろしくお願いします」

そう言うと、イチカワは丁寧にお辞儀した。

「このようなところにお呼び出ししてすみません、佐藤さん。しかし仕方がなかったのです」丁寧なイチカワは申し訳なさそうに言った。

「われわれN J Nは日本に支社を持ちません。そしてわれわれの仕事では秘密に行動することが大変重要なのです。ですからホテルなどサヴェイランスカメラのある場所は好みません。その結果このような場所を選ばざるを得なかったのです。ご理解ください」丁寧なイチカワは再度頭を下げた。

「心配しないでください。全く気にしていませんから。ただ少し驚いています。『本当』なんだって」佐藤は興奮を抑えるよう努めながら言った。

「そう。『本当』なんです」

白い歯のイチカワは佐藤の横に腰を下ろした。そして持っていた細長い紙袋を脇に置くと、佐藤の顔を

見ながら話し始めた。

「早速ですが、本題に入らせてください、佐藤さん。われわれN J Nの仕事に関しては既にご存知でしょうか？」

「はい、大まかには把握しているつもりです。インターネット上でニュースメディアを展開している会社として大変有名ですから。スクープも多いですよ。特に先日の中央アジアの小さな国が月面着陸に成功したニュースの独占中継は本当に衝撃的でした！」

佐藤は興奮を抑えきれず言葉の終わりが早口になってしまった。

「そう。月面着陸」

白い歯のイチカワはうなずいた。

「そのような独占中継はわれわれN J Nがもっとも得意としている分野です。そのためわれわれN J Nは独自の取材エージェントを世界各地に配置しているのです。そしてそれらすべてが匿名のエージェントなのです」

「なるほど」佐藤は納得した。そして続けた。

「つまり今回の求人はその匿名のエージェントの仕事というわけですね」

「そう。匿名のエージェントの仕事です」

白い歯のイチカワは繰り返した。

佐藤は、さらに質問した。

「N J Nのウェブサイトは広告がないことでも有名ですが、やはりそれは広告収入の代わりにニュース記事を他の会社に販売することで収益を上げているということですか？」

「大変鋭い質問ですね、佐藤さん」

イチカワは真っ白な歯を見せた。

「そう。われわれN J Nはニュース記事を他の会社に販売することで収益を上げています。しかしそれだけではありません」イチカワは続けた。

「われわれN J Nはニュースを発信すること自体で報酬を得ることもよくあります」

「ニュースをN J Nのウェブサイトに掲載することでその対価を得ているということですか？」

「そう。ニュースをN J Nのウェブサイトに載せることでお金がもらえるのです」

白い歯のイチカワは説明を続けた。

「ニュースといってもいろいろな種類のものがあります。その中にはニュースの当事者が、ニュースを他人に知ってもらいたいと望んでいるケースがあります」

「例えば企業の利益や国家の外交上の駆け引きが絡んだものなどはこのケースに当てはまるのがよくあります」

「そのようなニュースの当事者は、金を払ってでもその情報を世界に広めたいと考えるのです」

「そしてそのようなニーズは情報社会の発達とともにどんどん大きくなってきているのです。わかりますか？」

イチカワは澄んだ瞳で佐藤の目を覗き込んだ。

「はい。わかります」佐藤はすぐにそう答えたが、本当はよく理解できていない。しかし、ただそうなのだなと思った。

澄んだ瞳のイチカワは続けた。

「われわれN J Nは世界各国の主要なニュースメディアにもエージェントを忍び込ませています。ですから、N J Nから発信されるニュースは、これらのエージェントを通して他のニュースメディアにも全く同じ内容で伝わります」

「つまり、われわれN J Nはあらゆるニュースを同一の視点で世界に広めることができます。たとえそれがどのようなものであろうとも」

「どのようなものであろうとも？」

「そう。どのようなものであろうとも」

澄んだ瞳のイチカワは佐藤の目を覗き込みながら繰り返した。

イチカワはおもむろに立ち上がり、そして川を指差して佐藤に尋ねた。

「佐藤さん。あなたはここに何があるかわかりますか？」

「えっ？ 何って川ですが……」

「そう。川です」

「あなたにとってそこはもうずっと川なのです。佐藤さん」澄んだ瞳のイチカワは落ちついた表情で続けた。

「そこにはたくさんの大きな石がころがっています。表面がすべすべした石なのでその上を裸足で歩いても痛くないのです。わかりますか？」

佐藤はうなずいた。

「ちょうどよい足場になる石を選びながら足を進めていくと、その先には草の茂みがあります。いろいろな種類の草が絡み合っただけの茂みです。そこにはたくさんの虫が住んでいます。危険なヘビもいるかもしれません」

「その茂みをかきわけて進むとそこには小さな水溜りがあります。川が流れを変えたときに水がせき止められてできた水溜りです。そこにはたくさんの小さな魚が住んでいます。フナ、ドジョウ、メダカ、ドンコツ、おたまじゃくし、いろいろいます」

「その水溜りの水は驚くほど透き通っています。釣り針にご飯粒をつけて垂らすとフナが寄ってくるのが見えます。そのフナの口に釣り針がかかり釣り上がる様子もはっきりと見ることもできるのです。わかりますか？」

佐藤はただうなずいた。

「しかし、そこはもう川でしかないのです。佐藤さん」

イチカワはそこまで話すと、澄んだ瞳で佐藤の目を覗き込んだ。

「佐藤さん。これが何だかわかりますか？」イチカワは脇に置いてある細長い紙袋を手を取った。

中にはフランスパンが入っていた。

「フランスパンですか？」

「そう。フランスパンです」

イチカワは澄んだ瞳で佐藤の目を覗き込んだ。

「これはモリアというとても有名なベーカリーのフランスパンです」

「モリアですか」

「そう。モリアです」

「とても有名な店ですか」

「そう。とても有名な店です」

澄んだ瞳のイチカワは佐藤の目を覗き込んでそう答えた。そして細長いフランスパンの両端をつかみ、それを半分に折った。一方を細長い紙袋にしまうと、残りの一方を手に取り、そこから一塊をちぎり取った。そして「どうぞ」と言ってそれを佐藤に手渡した。

佐藤はそれを口に入れた。

「とてもおいしいです！」

「そう。とてもおいしいです」

澄んだ瞳のイチカワはそう答えると、フランスパンを一塊ちぎり取り、それを自分の口に運び、ゆっくりと噛みしめた。

食べ終わると、イチカワはまた一塊をちぎり取り、澄んだ瞳で佐藤の目を覗き込んだ。

「では、もうひと口どうぞ」

佐藤はそれを受け取り、口へと運んだ。

佐藤はそのとき自分の目が大きく見開かれていることに気がついた。イチカワの瞳に吸い込まれそうなのを必死でこらえていた。

「どうですか？」

イチカワが佐藤の目を覗き込んだ。

「とてもおいしいです」佐藤は大きく開かれた目で、しかし小声でつぶやくように答えた。

「そう。とてもおいしいです」

澄んだ瞳のイチカワはさらに佐藤の目を覗き込み、落ちついた口調で続けた。

「佐藤さん。実はそのフランスパンは毒です」

「このフランスパンは毒？」佐藤はなぜか驚くことができなかった。そして、どうして驚いていないのか、初めて自身の心に目を向けた。

「そう。このフランスパンは毒」澄んだ瞳のイチカワは続けた。

「それは私には無力ですが、あなたには作用する毒なのです。わかりますか？」

大きく開いた目の佐藤はうなずいた。ただうなずくことしかできなかった。

澄んだ瞳のイチカワは佐藤の目を覗きこんだまま続けた。

「佐藤さん。あなたの呼吸はだんだん苦しくなります。そして目の前が暗くなる。意識もだんだん遠のいて……」

「あー……」佐藤は意識を失った。

太陽はもう川の向こう側にはない。辺りには人影はなくベンチに横たわる佐藤の影がただ平たく川の方へと伸びている。

その平らな影はわずかにふらつき、一度、二度、そして三度目で大きく伸び上がった。

佐藤は意識を取り戻した。目は大きく見開かれたままで、口はぽかんと開いている。

頭はまだぼんやりとしている。頭を何度か左右に傾けて首筋を伸ばした。両手で頬をたたきぽかんと開いた口を閉じると、まばたきをし、大きく見開かれた両目を元の大きさに戻した。ベンチの上に目をやると、そこには細長い紙袋が残されている。しばらくそれを眺めぼんやりとした頭で考えてみた。そして、それを手に取り中を開けてみた。中にはフランスパンが半分と小さな紙切れが入っていた。

佐藤は袋とフランスパンをベンチに置き、小さな紙切れを手に取った。そこには大きな字で「藤田パン」と書かれていて、その下には「フランスパン」の文字と百五十円に消費税が足された金額が記されている。

佐藤は腕時計に目をやり、そして辺りを見回した。やはり人影はない。しかし、そこには朝の羽虫の音があり、川の流れる音がある。音だけではない。草のにおい、そしてあの安っぽいフランスパンのにおい。そよ風が頬をなでるのもはっきりと感じられる。

佐藤はメガネをはずし、ベンチに置くと、ゆっくりと立ち上がり大きく息を吸い込んだ。

上着を脱ぎ捨てた。ネクタイを解き空に投げ捨てた。シャツのボタンを二つはずし、胸元を大きく開いた。袖をまくり上げ、腕を突き出した。靴も靴下も脱ぎ捨てた。そして川辺へ向かって進んでいった。

顔を上げまっすぐ前を向いた。そこには朝日に照らされた幾何学模様が生き物のようによごめいている。有名な建築家によるデザインだ。

佐藤は真っ白な歯を見せた。